礼拝説教（2020 年 12 月 27 日）

説教者：中村信哉

人にではなく主に仕えるように

エペソ人への手紙６章 5-9 節

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。今月のテーマは「社会生活」です。通常は、毎月第一週の礼拝の説教で、その月のテーマに従ってお話することにしていますが、12 月の第一週は「アドベント」でクリスマスのお話をしたので、クリスマスも終えた 12 月の最後の週に、テーマに従ってお話したいと思います。

今日の聖書箇所では、「奴隷」と「主人」の関係について書かれています。クリスチャンの「奴隷」はどうあるべきか、またクリスチャンの「主人」はどうあるべきかが書かれています。現代の日本社会では「奴隷」はいませんが、この関係性は、会社での「部下と上司の関係」、また学校での「生徒と教師の関係」、また家庭での「子どもと親の関係」また「妻と夫の関係」に適用することができると思います。

私たちは「社会生活」の中で、それぞれ「身分」や「役割」があります。「上司」であったり「部下」であったり、また「生徒」であったり「教師」であったり、また「子ども」であったり「親」であったり、「妻」であったり「夫」であったり。今日は、それぞれ自分の「身分」や「役割」と重ね合わせながら、この聖書箇所から共に学んでいきたいと思います。

1. キリストに従うように

5-7 節には、このようにあります。**「奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい」**。

当時の小アジヤの社会では、「奴隷制度」がありました。今日の聖書箇所を見ると、当時の「奴隷制度」の実情を垣間見ることができます。「主人」は、「奴隷」に対して、報いも与えず、脅したり、差別をしたりしていたようです。それに対して「奴隷」は、「主人」に対して、「ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方」をして、喜びもなく嫌々従っていたようです。「奴隷」も「主人」もお互いに関係が悪く、心が通い合わないような状態だったようです。

私たちの「社会生活」でも、「部下と上司の関係」や「生徒と教師の関係」や「子どもと親の関係」や「妻と夫の関係」がお互いに悪く、心が通い合わなくなることがあります。しかしこの手紙を書いた使徒パウロは、クリスチャンであるならば、そのような「社会生活」においても、イエス様を見上げるべきだと言うのです。

パウロが、クリスチャンの「奴隷たち」に命じていることは、イエス様に従うように、「地

上の主人」に従いなさいということです。ここには、「地上の主人」という表現があります。「地上の主人」がいるということは、「天」にも「主人」もいることになります。「天」におられる私たちの「主人」は、イエス様です。６節には「キリストのしもべ」とありますが、この「しもべ」という言葉は「奴隷」という意味です。

私たちクリスチャンは、イエス様の「しもべ」であり、イエス様の「奴隷」です。私たちは、イエス様を信じる前は「罪の奴隷」でした。「罪」に支配されて生きていました。そして、その「罪」のゆえに、この世でのあらゆる苦しみと悲しみを招き、肉体の死と永遠の地獄の刑罰を辿る運命にありました。しかしイエス様が十字架に架かり、御自身のいのちを代価として払い、私たちを「罪の奴隷」から買い取ってくださいました。そして「神様の子ども」「イエス様の弟子」「イエス様の奴隷」という新しい「身分」を与えてくださったのです。

私たちクリスチャンがまず第一に従うべきなのは、「罪」でもなく「地上の主人」でもなく、イエス様です。私たちがまず第一に従うべきなのは、親でもなく、学校の先生でもなく、会社の上司でもなく、夫でもなく、イエス様です。この優先順位を、私たちクリスチャンは、はっきりさせなければなりません。この優先順位が曖昧だと、私たちのクリスチャン生活は崩れていってしまいます。

私たちがまず第一に従うべき方は、イエス様です。そのイエス様が、「地上の主人」に従いなさいと言われるので、私たちは親に従い、学校の先生に従い、会社の上司に従い、夫に従うのです。そして私たちは、イエス様御自身に従うように、すべての「地上の主人」に従っていくのです。

「地上の主人」に従う時に、パウロが強調していることは、「心から」「喜んで」従うということです。それに対して、「ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方」は止めなさいと言っています。

「地上の主人」は、必ずしも従いやすい人たちばかりではありません。当時の「奴隷」の「主人」のように、未信者であった李、報いを与えてくれなかったり、脅したり、差別をしたり、意地悪な主人もたくさんいます。理不尽な要求をしてくる主人もたくさんいます。しかしそのような中でも、クリスチャンは「心から」「喜んで」従うべきだとパウロは言うのです。そのような中でも、クリスチャンは、イエス様を見上げれば「心から」「喜んで」従うことができるはずだと言うのです。「地上の主人」とイエス様を重ねて、「地上の主人」をイエス様だと思って仕えれば、心に「喜び」が湧いてくるはずだと言うのです。

私たちには、「地上の主人」に対する不満というものが多少なりともあるでしょう。「地上の主人」も人間ですから、欠点はたくさんあります。しかし私たちクリスチャンにとって、「地上の主人」の欠点は、従わなくてもよい理由にはなりません。うわべだけ仕えていればよいという理由にもなりません。私たちは、イエス様のゆえに、どんな「地上の主人」であっても、「心から」「喜んで」従うべきなのです。

2. <u>主からの報い</u>

私たちは、理不尽な「地上の主人」に従う時には、自分がバカバカしく思えるかもしれません。自分だけが損をしていると思えるかもしれません。しかし８節には、このようにあります。**「奴隷であっても自由人であっても、良いことを行なえば、それぞれ主からその報いを受けることを、あなたがたは知っています」**。

私たちがイエス様に従って、「地上の主人」に「心から」「喜んで」従うならば、イエス様が報いてくださるのです。逆に、コロサイ３：25 に**「不正を行う者は、自分が行なった不正を報いとして受け取ることになります」**とあるように、私たちがイエス様に従わず、「地上の主人」に「心から」「喜んで」従わなかったならば、イエス様から裁きの報いを与えられるのです。

パウロは、このように言いました。**「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです」（Ⅱコリント 5：10）**。私たちがした良いことは、必ずイエス様によって報われます。また私たちがした悪いことは、必ずイエス様によって裁かれます。もちろんイエス様によって義と認められている私たちは、すべての罪は赦されますが・・・。

理不尽な「地上の主人」に対しても、イエス様のゆえに私たちが従うなら、イエス様が必ず報いてくださるのです。たとえ「地上の主人」が報いてくれなくても、「天」におられる「主人」であるイエス様が報いてくださるのです。私たちの良き行いは、決して空しく終わることはありません。イエス様が必ず見ていてくださるのです。

また理不尽な「地上の主人」は、やがてイエス様にその行いに応じて裁かれることになります。イエス様は私たちのために、正義に基づいた公平な裁きをしてくださるのです。

私たちクリスチャンは、イエス様を見上げる時、耐え忍んで希望をもって「地上の主人」に従うことができるのです。

3. <u>キリストと同じように</u>

しかし私たちは、ある時は「地上の主人」の「役割」を与えられる時もあります。夫になり、親になり、学校の先生になり、会社の上司になることもあります。クリスチャンである私たちは、「地上の主人」になった時に、どのようなことが求められるのでしょうか。妻や子どもや生徒や部下が変わるだけでは意味がありません。夫も親も教師も上司も、クリスチャンであるならば共に変わっていかなければなりません。

９節には、このようにあります。**「主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。あなたがたは、彼らの主、またあなたがたの主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っているのです」**。

「地上の主人たち」には、イエス様と同じように「奴隷」を扱うことが求められています。イエス様は、良いことを行なえば必ず報いてくださる方です。またイエス様は脅したりしません。またイエス様は人を差別したりしません。「地上の主人たち」は、愛と正義と公平さをもって、妻や子どもや生徒や部下に接していかなければならないのです。

「地上の主人たち」は、自分たちに従う者たちを、自分の思い通りにできると考えがちで

す。しかし、自分たちに従う者たちの真の主人はイエス様です。私たちは、彼らをイエス様からお預かりしていると考えなければなりません。決して私たちの思い通りにできる存在ではありません。また私たちもまたイエス様の「しもべ」であり「奴隷」であることを忘れてはなりません。私たちは何でも思い通りにできるわけではありません。私たちは真の主人であるイエス様を恐れおののきつつ、従わなければなりません。

パウロはこのように言いました。**「主にあって召された奴隷は、主に属する自由人であり、同じように自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです」**（**Ⅰコリント 7:22**）。

地上のすべての権威は、イエス様にあります。「地上の主人」は、イエス様に権威を与えられて上に立たされています。その意味で、イエス様の代理と言えます。クリスチャンである「地上の主人」は、イエス様の代理ですから、イエス様を現していかなければなりません。イエス様のように、妻や子どもや生徒や部下に接していかなければなりません。妻や子どもや生徒や部下が、私たちを見たらイエス様が分かる、そのようになるぐらいイエス様を現していかなければなりません。それが「地上の主人」に求められていることです。決して自分の権威に胡坐をかいて甘んじてはいけません。

おわりに

私は三年前から週三回、地域のリハビリデイサービスでアルバイトをしています。私の仕事は、朝と午後に、高齢者や障害を持つ利用者さんを自宅から施設まで、また施設から自宅まで車で送り届けることです。安全に車を運転し、利用者さんの車の乗り降りを介助します。私は、教会では「先生」と呼ばれますが、アルバイトの職場では「中村さん」と呼ばれ、一人の従業員となります。そして上司に従い、会社の方針に従います。幸い職場の皆さんは良い方々で、私が教会の牧師であることも知っていてくださっています。

私は自転車で通勤しますが、通勤の時に必ず心の中で五つのことを祈ります。一つは、車の運転をしますから、人身事故、接触事故、利用者さんの乗り降りにおける転倒事故から守られるように。二つ目は、新型コロナウィルスの感染から施設が守られるように。三つ目は、私が今日も、イエス様に仕えるように、利用者さんや職員の方々に仕えることができるように。四つ目は、施設の所長のために。所長が神様を恐れつつ施設全体を導いていけるように。五つ目は、御心なら施設の中からイエス様に出会う人が起こされるように、です。

私はアルバイトを通して、人に仕えること、人に従うことを学ばせていただいています。

私たちはそれぞれクリスチャンとして「社会生活」の中で「身分」と「役割」を与えられています。私たちは、「信仰生活」と「社会生活」を決して切り離してはいけません。「信仰」をもって「社会生活」を送らなければなりません。「信仰」によって、私たちの「社会生活」も変わるはずです。あらゆる関係の中で変化が起こるはずです。イエス様に対する「信仰」は、私たちの「社会生活」を変える力があり、私たちに耐える力と希望を絶えず与えてくれます。またイエス様に対する「信仰」は、私たちの「社会生活」の壊れたあらゆる関係を回復する力があるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちには、家庭・学校・職場など、あらゆる「社会生活」があります。どうか私たちがその「社会生活」を「信仰」の目で見ることができますように。そして「イエス様のしもべ」として、「社会生活」を送ることができますように。そして与えられた役割を、あなたの御前に忠実に果たすことができますように。どんな困難の中でも、イエス様を見上げて乗り越えることができますように。「信仰」によって力を与えてください。

この祈りを私たちの真の主人であるイエス様の御名によってお祈りします。アーメン。